

第1話 北條氏の執権

げんじ ほろ あと ほうじょうし ぼくふ じっけん にぎ てんか せいじ と
源氏が亡びた後は、北條氏が幕府の実権を握って天下の政治を執る。
しょうぐん な ぼくふ ていさい ととの いただ
将軍はあれども無きにひとしく、ただ幕府の体裁を整えるために戴かれている
かしら す
長に過ぎなくなる。

ぶ け せい じ 武家政治

ご と ば よりとも せい い にん
第82代後鳥羽天皇の建久3年(西暦1192年)7月、源頼朝は征夷大將軍に任ぜられて、名実共に武
かしら ぼくふ かまくら てんか せいじ と じつ せいれい へんかく
士の長となると、幕府を鎌倉に開いて天下の政治を執った。実にわが国の政礼の一大変革であって、
いわゆる ぶ け せい じ かまくら
所謂武家政治の始めです。この時から後およそ140年間は、政治の中心が鎌倉にあったので、この間を
かまくらじだい
称して世に鎌倉時代といっています。

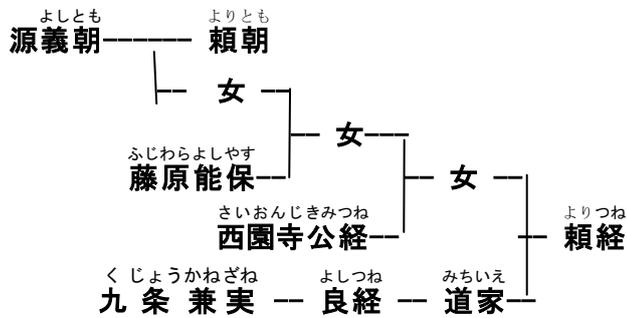
げんじ じっけん にぎ わづ よりとも
とはいえ、源氏が幕府の実権を握っていたのは、僅かに頼朝が在世中の7、8年だけであって、その
ほうじょう しっけん ひと じゅんとく けんぼう
後は北條氏が執権となって独り政治をほしいままにしているうちに、第84代順徳天皇の建保7年(西
暦1219年 - この年4月12日に改元して承久元年となる)正月、3代將軍実朝が公暁に殺されると、実
さねとも くぎょう さね
朝には後嗣がいなかったのに、公暁もまたすぐに執権北條義時に殺されてしまったので、(第二卷、「平
とも あとつぎ くぎょう よしとき
安時代後期、鎌倉時代」の「第22話 源氏の滅亡」に詳しく述べたように)源氏の血統は全く途絶えた。
くわ の けつとう まったく とだ
実に頼朝が將軍となってから僅かに父子3代、28年で源氏は亡びたのでした。

しっけん 北條氏の執権

じっけん うつ すで
しかしこの時には、幕府の実権は完全に北條氏の手に移って、幕府は既に源氏の幕府ではなく、北條
せいりよく がんらい
氏の幕府になっていたのですから、鎌倉の勢力は少しも動かなかった。けれども、北條氏は元来源氏
けらい みづか いえがら し しょうぐんしよく
の家来でして、自ら將軍となれるような家柄ではなかったし、強いてなろうとすると、源氏の將軍職を
うば こと しんよう うしな
奪った事にもなって、天下の信用を失うおそれがあった。

よしとき あま まさこ ご と ば いただ
それで執権の北條義時は、姉の尼將軍政子と相談して、後鳥羽上皇の皇子を將軍に戴きたいとお願い
した。しかし上皇は、源氏の血統が絶えたからには、天下の政治は当然朝廷ですべきであるとお考え
けつとう た ちやうてい
になった時であったし、かつ、皇子を鎌倉に下して、万一、後日に京都と鎌倉との間に勢力争いでも起
か おうじ かまくら くだ まんいち ごじつ せいりよくあらし
こるようなことがあってはいけない、ともおぼしめたので、これをお許しにならなかった。それで、2
さら くじょうみちいえ よりつね あとつぎ ゆる
人は更に左大臣九条道家の子の頼経を迎えて將軍の後嗣にすることをお願いして、その許しを受けた。
よりつね よりとも たしょう えんこ
頼経の母は頼朝の妹の孫に当たっていたので、源氏に多少の縁故があったのです。

第1話 北條氏の執権



名ばかりの将軍

こうして よりつね 頼経 は じょうきゅう 承久元年 - さねとも 源実朝が殺された同じ年 - の7月、鎌倉に迎えられたが、その時、僅か2才でしたので、すぐには将軍にも任ぜられず、その後、九才になって始めて任ぜられたが、もとより名ばかりの将軍でして、政治は専ら北條氏が執っていた。ちょうど平安時代に、藤原氏のご幼少の天皇をお立てして、その名で天下の政治をほしいままにしたのと同じです。多分、北條氏はそれをまねたのでしょう。

よりつね 頼経の後に鎌倉の将軍となった人は、その子のよりつぐ 頼嗣と、外に四人のしんのう 親王方がありましたが、その方々も皆、実際の政治には関係されず、ただ幕府の体裁を整えるためにその長として戴かれているに過ぎなかったのです。

(第1話 北條氏の執権 終わり。 次は前頁に戻り、 第2話 承久の乱 へ)